特別
へ5
6566

へ5
6566

坐りし子

發句脇第三の誠は教ふかり事なり心得のさまとする所なり

元先發句四季何れも切字乃至第一に或心乃西日と庵ふかく詞乃さまとする所なり

第二人情を詞乃つよくかつ句を第一脇ハ發句を平らに付る所なり

第三人を句うつしたく詞字とそうしうみとしるやう第三ハ時宜も

心もとなく新しきを主とするやうなり

早稲田文庫

〈-95-251〉

[illegible]は仕立[illegible]ぬ[illegible]豆皆連寄[illegible]
[illegible]いて[illegible]及ぶ事なきも
皆〳〵法と破[illegible]と異風[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
心[illegible]もの[illegible]に流[illegible]
[illegible]の功者[illegible]
[illegible]京田舎[illegible]歴[illegible]と信仰
[illegible]
連寄師なと加[illegible]
[illegible]
[illegible]やうのわしと思い入く同意
用[illegible]越[illegible]事

[illegible]と言つまい連寄師さんかくれ
[illegible]豆と言説道断の説法
[illegible]と心[illegible]
[illegible]
[illegible]仕立[illegible]歌の句心句作
[illegible]
寄[illegible]
[illegible]
[illegible]先
古[illegible]連歌[illegible]
[illegible]
同[illegible]
[illegible]

切着と思ハん面白おもしろきも中々と
かり付たれとやつと何文字りとも
もしいささか世話はちとよろしきは
面白くもおかしくも思つまりて文字
はなはだしたりと賤しき人にこそ
身の上有情非情人名歸山の
風景四季轉変わりゆく事など
しも實と思ひ合さまさ其る事
なる人の思ふ筆によりなる處と
誠よ似たる佛もおもひまし事に
通ひてそ入馬追舟子の付まち
誠をもとめまうにあるうちまへてかなり

句作は皆ゆくまで真の力あれ誠心にて
思とも稚きる事とは那ゆ事あり
主歎の哀まさ一さうなる賤しく
ちもよしく人の口まねとなと思を
人の気の人の心おもひとしまは
何にし時しき詞とまつはりん今
まかり情をはなれく作者れかの
ばくゆ賤へ
発句とはこゑはあかみたとへく
いつもある数々ありとも自からまも
外に二つの物とらくへなきもすれ
也大きく似たるやうなまことも

心とん敗こかゝら似たる色をたゝへ
谷別の西咲きとふかくもなし
えたくさとにちむしくさきり
いつもとり秋至ぬはなさくらいきる
此様秋と人乃句をていへ
名かわやまわもみえ人の生ハ月句と
書也かいさよる所くはよく
ゆくゆくふるへし
去年立ハ雛ばのみこらばふ風寒
元日や日本かなふ文字も松
其家まくや此有ちのへりさん
当鶴の子まやさら代の春

ちり來よ あそひしらよ 初子日
世の中や上手さくらをむの春
廻文
梅咲るとれぞ遠さとるくさらん
春 秋ニ廻文
名ハ打得 梅ハたかりとも金一両か
あふぬ埜よりもたいめん萩の花
春秋何答是ハ鶴鶴なりと云し
雲乃名ハ立てまたみよ市町寺
唐乃待賤よんりと流し萩の花
廻文同附句
はとりふ山友の小野ことひかへ
みる冬の京 池の夕浪

漢和同入韵

幾回の春潤の色　題の句也

根本草ものやまの木の付タル也

風の手に入て　持扇

帆のまつ月ふかうなる牧の色

文月　可甲入

弟也下さまもてらなる也

光儀　窓　始て雪

学者の独は男と女

付句之秘

声なくも也や結ぶこゝろ矣

みはくまふる春の一百鳥

是ハ瓜のつくばさ高ハ何也

肥ふるも痩ふるもとも也

嚴さしの日ハ日はて

子何の学やとも

蓮髪ハ一首と思ハ也

秋ふり仰ふ陳ふかゝ也

を用ふれの類ハ

うちもうふ舞もまわ

鉄砲雲井ハ海と月面

事行と継ふうふ

天神とも世ふ

才一ふ国常ふ

小野氏天神と七代のそうまれかわり
是に親しきの中にまゝ母乃母と
ひとしく多ゝ
他人を他人中とくこんの
ほうゝぬ母まぬけ宮ゐとく
ひかやう白作ゐと矢へとゝあへと
男ひとゝ宮ゐ但よ歌類乃中
ゝ女婦ゝ成ゝんも他人の
母ゝ婦ゝ心ゝ
ほゝうゝ
ゝ矢ゝ古則氏歌と且事ゝく
是ゝ宮氏ゝ乃ゝ法乃ゝ寺

泉潟乃連寺何ゝも時代かゝれゝ
其ゝ宮ゝ西ゝ云ゝ
ゝゝ母ゝ心ゝ
古ゝ連歌ゝ
花ゝ也ゝ
川岸ゝ歌ゝ
ゝ寺ゝ
働ゝ
河岸ゝ
川岸ゝ氏歌冬ゝ
かゝ
うゝ

あしく聞えはかなき事なれ
聴く也と云句に寄添て付る事も
去りとては三躰なき事は是也に
及ぶ但前句の秘作意の出て様に
去てむつかしくきこえさる
異の松は海老とや云らん
思ひしは定まれる此付やうは
西に東にて面白さに異なる類
しかしては定まれは心の深き付様は
様々に皆対付に成安し是は専
一の義にて有也但前句によりて何
ともつくべき所にいひやうに付たる対付也

まかせて句毎に心をとまらんやと
思ひ出也又此海の松の付句は也と
花と一向に云てよみいはれまじきや
に付る事は付もとく出世の人に
嫌ふ也
早く事々にして事に一座と
いふとも心一向に出るなかれは思ひ
の事なき事に付ても心と付ては
我まかせにやまし出るかを
さいふとも此事は心の事なれとく
西よく事は心のとく成なきに心を
いふてみれと思ひつくる也 其趣きと

まことみよしと思ふ人もなしや
御無は信心はねこそわかくいれ
まてもよく読てさきれと思ひて誤
る事もなく何しくきとむ我も人も
口曲くなくせしてそとわ揚り出る
也誹諧の発句も附句をも物数
詞乃弱く優にやさしく上手め
かしきをひとしきなれ事と
きくこと也色々下手なるもなき
譬へは手おりある人乃一字はくを
義なく見えまと教と云はくあ
てよろしぬるされたるらいれ

ゆきまことしつゐ式寛さいかろきま
ありおかとならもなき一字つ
もいはむ程くもよきさ法書と
よて稀なる事とみえきね
我志てと多く心さまはいえ為
よきとけなきさいさ物我なき人
まつるよきよろしかるし

寛文七年六月廿五日

立圃

前句并批判　岩倉中納言殿　三圓

沖行句　近情激

蕎麦　雪乃あとを餅とて餅はまいまこと

清水の雪一しほ白くみなる

雪解に面白くほりもれるこのさん

正月に初もをくれぬ歌とて

菜草根の白河とり合せたるやや

下戸なれども酒をもるむの陰

あとその河と雪をもとめ下戸なれ

ゐさあり下戸なるあるぬるを一

ちまちの雪しいまき雪家

蕎麦　酒のさかなに寒さ

長山乃陰とうとうとる道心若

同　花ゆゑ雲ゆゑ雲見よ同とうとうとるみれから

雲見よ同とうとうとるみれから

いるあとうとうとる佛とうとうとる佛とうとうとる

事なくそなは

山寺の小僧に寺小僧ほうき

ほうきとうとうとうとうとうとうとう

山寺乃庵ほうきとうとうとうとう

清潔なる水と同の水みるこのやと

男しやるる同一桐遠人とうとう

蕎麦　きくはみくやゆるれ日を

前句　秋ものあつ人多ゆ扇の花

[illegible]

晴海の月はさしは小萩原

月数かもて秋萩ふよひかりにく

是とも誠きしはみをを絡つ事海

[illegible]

[illegible]

水もまた月しかの月乃鏡とく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前句 [illegible]

[illegible]

冬の夜[illegible]

[illegible]

名香[illegible]

[illegible]

雪乃日[illegible]

上[illegible]

前句 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そと程なく

いとこ兄弟姉妹父母祖父

細くこまやかに

なりくるしく

前句 合歓なき心ねとそ立侘ぬ

なしいたやとそよこ寄つしもを

何のまもしらるるとそうやうてわしさう

もなくとやりつるん

まつ人こそまあさらん

会歓なきに恋とうつ

いとつ物の秘い恋

かりの心根乃人物のそうつ

はかり入侍つるとそ

三のまとり

前句 人まとりとそ小指とこそ

恋とて 哲云 父と母とうき

なるいまつ恋とつ

四元こそない

隠密の道ぬ奥ぬ入く

三てしくい

盗さ人親ぬ

ぬとやるやこい

前句 とこくこと 独侍人

反逆ぬ

子を連て見る宿をかす法
山さらに出る切てく跡さしく
あいまに夜る鍋もをきに
山居乃庵はさまくに臨むる
鈴木氏小国道の其の跡
前句 佛を何とさして申上へきさ
是にいとをまはさうあ同葉
此哥をくりを清家にかり大
事たくことを佛前に跪す申は
くるいにうたゝいいれる同此内
前句 一文字よい出るしいをたら
此馬も上々の上を事さいきれもとく

子細工ハ裏白といふまやめまへ
子細工といふ者しらさ所申しらへハ去てしれ
やうにする也
同利なる刀乃銘ハ道いふや
子細工する上ゝ裏白ハ見る芸さ
同中ゝ人是ハ道まかるやうに作れは
敵陣より下る下軍まく
めてしまい作意に又は
御付句四十二句 管見七十二句
内長十二
右前句并に批判 宗家中納言殿
近衛殿
付句
立圃

前　おくみよりこころをのこしの事
七宮ひる代はまとりいもうとの
まとりまする相何まう寄とをと序の行
はれ今ようへ長く短くしまを数の也経
まてよくはひるる体を上を乃仕業の
文殊しまし誠る筆乃先
此筆乃先徳書のを体こみえ
前　注ひ也はをけれ方
永き日を還俗の恐也言く
折烏帽子とをを還俗の紙乃山と
あしまをいるぬ
七宮わるる徳はを
前　心ををとをしの事
ゆるかは也まをかるる捌まり
国張はは相をるまかく
くをるぬはをる
賊の女る月みく涙心魚の前
小家のさんをせに出く涙心徳を
やうをわ
うを相まの前を留見ふをを
めをいをを徳いをを
前　おををの人まく清め宮解
てんく相をを相言をを也解を
由乃のををふをはををを

世間にて西瓜とて
名のごとく氷砂糖やかくうん
前句 恋ゆえ身は普段と成よりも
人待ぬ市とくこそ馬けり
常よりたくさん花とろ、日の長
くなる行句の郷
前句 別れ惜ぬ姿
眉間にさしたる黒の如きとく
此前句詠句をみるに面白く付まし
ども俳諧心を深
寒菊の馬や通てん恵入道
此寒菊の馬とくも門出まてるあるる

前句 くさ花ひとりの者
乗心ゆえ世を隠と言るし
若旦那家はさこに我身はまるく
前句 碑ひらの乃ゆ廻くし
美ちとて間は空目乃大天狗
つの山とまふ古寺の行くれ合わる
天狗碑の相なる何なる所へ
獣を苔乃ゆを通迎かくを
前句 九もあれ何も四角をみる
小いなる何とかもとも入さ先
照り酒上乃程五ちい
真草に古寺完了る間かまん

四角なる丸さ四角なる丸さ四角なる
とゝを上下乃相違やすを但しなるこゝ
前句 星花一面に一面に月
尺八を吹乃笛を吹乃
相を吹りなる尺八なる
雛なる料理にて出るなる
前句 よきもあしきも同て知あり
以六名立つゝ上乃石ゆし
真理を吹笛に
何ゝ寄ゝ寄ゝ何なる人
前句 なまなるもあを吸なる法の師
時を成人ぐさ乃なるなる

ゝなるゝ汁と思しるし
此句なまなるゝ乃なる作なる郎
前句 独ぬるもみあるる教り
みゝ野やなつゝ乃舞輝く
はるゝ乃雨やは
池大はしるゝ乃ゝとゝ
独理なるまゝ教りゝゝ灯なり
句論乃やゝてゝ乃ゝ
前句 あゝ西日とゝやゝと猿楽
いつなるゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ中編
已上付句二十九句之内
御題二十句内長八

三花はなをけうじんを同じくせる
瓶の梅と題へ不審なる
集く風雅はなをもつて是を見
るまことにかくの梅の枝をもつて
世を題して句なをもつて
結ぶ句一句として心をかなひ
しんとえはけしき

一花開よりはじめて四方の春
ようとやる雨のあとはなんく春も
まさしくはくの色香を取り
又一の葉なをけしく春の
はなく結ぶ為のようにこれ乃陸奥の

歌つまりはんくとしれなを井ゐの
山のまわりに玲瓏たる春も
及ばく何しもいそいでそんん
ものとして其春よりはるを
感ん事なるべしとあるを
て其代乃ことに花のあるく
なん事とてくこと瓶乃上よりいとて
ぬ事なるとてもまた色をさて山
ふるさと佐保山乃春風にまかせ
落るつまて見ぬを春をかく
作りしに剥落のまるを瓶
は根乃岑よりもとをみるの川

河のとゑ々つまさきあゆみあまたら
川乃岡瀬とうつりかはる風景と
月乃両頭つゝきて五十みを杜
の草花も見事にあそひしを覚えて
瓶にさしてやめんかへん花色

立圃

花中之十徳

一刻轉萬景
河のよふ鳥やみとくく花の山

道場内荘嚴
七宝もまあらはしやむの露

平日見四季
仏御の心のまゝに作り花

招枯木称花
枯木にはなもみるや心の花盛

入山林成主
ゆるさしめあまりしなれむの山

一枝成遠近
前ぬまい坂や見越の花乃雲

見之者化情
みなまくや花を何とかうかれ

毎朝友自樂
何も世やみなとひとかれ花の友

炎日惜涼
暑さとや垂にほしの桜の木かげ

不行見山海

海山やしらぬこゝろにかゝる旅のもの

人生れ出ては九重は上の宮と
云下は百也柄迫まで田舎と諸国
にて武は海山の遍野帝也川渡
又は世離まするは鴻く住まるく
鳥獣まておとしもみたし司信
室つまりは家こいふ文也先富貴の
家まて生れくは稲雑の中にもすく
おゝめとつきまて限こ笑ひこも
や鴬の中まてくしますくを也まれ

作る也とてもいふも壱まて出来ぬ
なりをは日まで深く耳はさとく心わ
聞はいも見やりしこあらみえ
ありて経あるはまこいかく年月は
まさいふ時にまとめれとの瑞ま
ならぬとくおりまし親よ増る疑ゐ
もえと思ひし又心ささのこかしこ
かつねと業ておいく富業子人も
多くなりかかる人の中は事の兆
つかめ出来く風くてまうなと
何も羽ともうつくへ身かる名れ
いやめまかしてはこうつる事くうわ

いひとさまあまたこそ今は祈りてもて
果てはてもて果てくいひをさんも
とこうまもしりくんえ十乃ふの
中まを分とあれ世ゑ蔵とうとし
世ゑ類なき何ことなりしかく
古代のおゑ双へくも見ともあ
ことをや又何ゆへくりてやさく
ことを果てつも貴き人の心り
あひくゑをやもくゆうまし家
内へかわなるまるしまるる
なけもうとそきゑ人と成もを
ゆとを中下れおゑ世ひしりるも

前世の業因ゆへ人間に生まれ
人を侵しあるとは何ものと
思ひ先世をくまてこうい年ふ
つき事しや上乃ふ
下乃ふとやもや中乃ふ
生るゑ苦しさまをはしりく
命の保ち清きこと我い都一
隙の町され出くて四十余年ゆ
思い苦をゆ内ゆうもるる
苦をまくを変の保ちくい
ア人ゆわ十をの極さもを人
何ゆ心何をもを方なき保ち

ふ鞠人傳は觀世音はつ[illegible]ふ
若き[illegible]を[illegible]百[illegible]夜[illegible]く香こ
主[illegible]を[illegible]閑[illegible]ま[illegible]て[illegible]年来
[illegible]も思ひの花をうらはれ
常に大仮よ住[illegible]し[illegible]く[illegible]も用も
成りむゆくまの障と直まんこ
世よは宮に住[illegible]人こ寄合ひ
あ[illegible]る[illegible]我若[illegible]し何[illegible]ぬこ
つる謡曲の主歌こ実を花乃春
月の松みる事ゆ[illegible]ま[illegible]
[illegible]ることこ思ひ[illegible]こ世
いさ[illegible]も世[illegible]と

紛[illegible]ん[illegible]外乃人の[illegible]を
[illegible]のつ[illegible]
みき[illegible]の[illegible]
思ひ[illegible]ひ今[illegible]
宝[illegible]よ心乃花[illegible]
立て[illegible]九[illegible]
り仮友[illegible]
解[illegible]
世[illegible]世[illegible]貴も賤よも
[illegible]
[illegible]
[illegible]
く何乃[illegible]

方にてつゝの花と思ひ分くるを
わきまへ侍なきこゝろの中を
るべしこゝに年毎に句を作るあく
も隔なく世の人々親子兄弟
しわをたてしるしに世益あるを
人をみをつるゝと思ひ例の
さまを句をまをるはあくまへ
しるさうもあるべきしるべ分の人を
いかんとて世中の定なきまゝて
年へかりし年月もるかなし
年毎の試筆句や三代
又
梅の香やこゝ江戸上屋敷

心月まつる新仏かな節を
東に咲んを世に咲ん親しく
しる人に望れ人々
よしをも西よりもはるかに
陸にいとはなるまを何
をたくと文よりかくこゝろ山人の
うてる春をみく伊乃梅
行るを知る人すを世を西
を祝儀の句とはしる祝会をまる
仏の座をみをつる如し
古つよいなんをいつ申をみを
まこるを人を又四年やをのくもん

ここに集とみしくさしゆかしきく
もんかしくさい思ひ人やもと秋
年比ち君を移りし人ちさまかや
みく京よりはきやかにけれんとさん
とれ老病はふみにも帰る
也此君平ちみ帰りまさん門之
しきとい人は門の母さし出るに比
秦重と云しか近くわかりくか
まく此浦乃四季わりく心り
庭のつき中とこえかたしと秘色雲
井よ帰り居てよ琳とも流りぬ
人とみをしとも中とみしく出

ほへまし文智論として世にも遺心乃
備なく親をあさましく人は今かくさ
別まりにみとわ子は母よ離るゝ
きほしらに袖もいつはと泪と
おもくそうりさはさ狭に一樹の陰
のやどりは何地よりかく一河の
なかまとしもを雖はの縁深くぬ
つゆと假に宣親は記の下帰した
心はしかしは方孝を毎毎り
四季ゆえもしは自ひらふ世乃
なしひさきとも母も乃わい
都よく入くもすをわれしと

我笑ハ親ハおやと思ひ子と
なる契りの深さハ心を語るよ
はまくりのと汲と流し為親
ハ海原や何をたのまし文
海の浪もあしこ心と梅をわく
わさるゝ人にはやるゝとなくところ
和歌の道に年まて舟さしそめ
く付句とも思ひはうしとてわ
う風に真つわと数まうしく出
対しと見ゆるなるへし
砂のねの雲井ありとる雛代人　泰重
もなしと風も筆も筆なる色

やとすは女神も何おもの月　智経
又此れ程なき末の松の枝　立以
川浪の縁の深さも春の水
連理の枝となる花のは　立叡
河舟は棹さす前途や船渡
機用意とはるかまち出たみ蘇　定親
京田舎花に心やうつすらん
おもへくは同じこんとこそ野のつゝ

方春

なるしるしあるを都より白人梅乃枝
のもとにおかせし歌の詞書

親十

まかりあはぬ心やりふれかはるを
のもとめるはなりくあるを後朝

為親

立あかりをしいかにあるこよ春の夜
のもとしるしの雪はしらくしるしの白雪

立圓

謝辭といへるおかしき事昇方
放埒なる事なりそれをあるとと
皆人思へる故上一句の和行心
干越の気味あるいとをかしき
耳にて自作は考
とけなるあるとは更にもとと
はなるを初人皆是はなく
次第に異風迷乃歌とのこ
なくこまかにもとさきはきく
やうにおかしさも面白さもうせ
果てうりこさそはけやり初
しをあれの名と侵をるを

前句に付合しまゝに新しき作
こゝろを感ずるにそうくるやうなる
句にあらねば次なりとわ古人云
いひそれも事もなく面白
しさ懐旧もてもあらはれて
涙さしくむ流さとそあはれ
なりけれと人麿を法人
年くたりの世をもはなれ事を
もまつ思ひおせるこそ昔
やはらく雨もそそけ意をぬ
新さとこゝろ付くるを専
心のまゝ道すがらはあるこそ

所やうに世界こゝろやうる
筆にしるすこゝろ
し俳諧と皆同じ道なりと
人毎に其筋を作り書り
思ひ付く師弟の契約となし
いひ出る徒の事は名言と
たゝうに深きこゝろ乃
道矢へ人をさこそ
なりまけのと配し我山一筋
と心明るいひ事まこゝろる
らを自作付心に貴今世寿連句
と沈楼に和法乃初法ひを

ひとつ元や何しく世中にを
こあるゆゑ貴下賜ふ事といふ
なほ注あるくらるるる
ますやいと美ぶおくと言ふ年八くいい
ふ事をうつせしゆへ入る人
まれくさいと連歌と洒落いを
別とこへあり不審ふ事歌乃
仏ありとい付ふ何ふ主てんや
連歌ハ二字ハ首韻ふ通ふる事
主歌ふとハ何ハ百つきん
洒落と斗二句ハ乃名也二句
三句ふとも付ふふ連歌なり

主歌の道ふかつて行心ふ
なりとゆゑ知ふ人ハ旦ひらき事
かくいふ所ふの云てハ連
歌師ふ洒落ハ成ふとくふ主てる
ものや答曰句論ゆふ主てふ人
同じ道ふ事ふ別ふ事ハ心
ゆゑあるとあり成ふ人ハ舟ふ
乗ふ船ハ極ふ乗て酒ふ主て
乗ふ和ふきハ立てふふとハ第ハ
連ふとハ成ふとも水の引ふハ同前
なり

八月十五夜

よき事の例とは云ふ共其事
ゝ詠ぜを思ひ出まゐる和歌
乃ちよい伴い出く月とゝんつ
人こゝろを必と面く奥とき
まゝ言あさきこゝわ出合ぬ事を
白河近くて水よのそやる是ぬこ
乃ちにとまゝ紙きる舟乃中
よ遊ぶ人花ゝてゆつゝ西
ゝ門のる稱を月待うゝ
いとゝく山ゝ比叡の大嶽
ゝる稲荷山まてゝあゝ四辺

星の祇名ゝまゝ山くゝ立ゝ
文寺宝くゝえゝいゝ致京
いゝくゝまゝ仰ゝ所ゝ
名所くゝゝ一月ゝ月ゝ
日代言ゝ月待事を
ゝすゝゝゝ心ゝ嶽ゝ
ゝゝ心ゝ
香ゝゝのゝまて月ゝゝ
ゝを面みえてゝつゝ和ゝよ
ゝゝゝゝゝ今ゝく
おゝゝゝゝゝ
出ゝゝ皆人ゝゝ

[illegible]
月を月とよんだのは何
例こゝろへとして白ひとりつゝ
行きて酔ひたるまゝそ
新の字を加へ例の名やれの月 三国
嶽れ名を出すの[illegible]玉珠[illegible]
秀や月をとゝ名乃一字 昌房
五名をとゝ名乃[illegible]や[illegible]月 知れ
[illegible]月の名やゝ[illegible]山 [illegible]
名月やれ[illegible]乃奇の反 [illegible]
水名[illegible]月名[illegible]川ぬ
一[illegible]れ[illegible]月見[illegible]

世[illegible]智者[illegible]人貧
福[illegible]貴賤道俗[illegible]命の
[illegible]
世代限[illegible]
[illegible]
始[illegible]
人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

老よる母乃歎よ事やまれし涙
も完事れいとあもしく思合
まさしいれをもれ所恋しこ戸を
都ゆとゝあ母乃姿なわと吟行
法よ奥つ事ともあるねと
母やよ行しれをもれいし
初と急よ実よ事りあなとを
右もたを知あ西なきを仮初
ゆり其家ゆ世ゆ思をもつと
言ゆ行を法よ心
三月乃成ゆ剃かれ
ゆ里はを人独ゆ求ゆ

世れゆ法名成ゆ友道
乃やうに思つきく家ゆと
さを祇ゆよ表ゆ知ゆ人多く
成く利男ひゆ分すく
京れゆ道やあゆまゆと
計うら法く年成ゆ過る其比京
も思吉を祇諸れを数多人
二を年年心よゆ つを成
文ゆ千百万成連を会を法
よ利ゆ成ゆ法ゆ御と男
人いを出年あかく年と重
あよ子共れ母いくなやみく

果なしとはねこそは難き老の
わきまへいつしん堂主はゆきかりや
うち色心寂しても心をちりまれとも
みしを来るめとは一ト段友達も
右おのれきる餞別の句なと数々
書はなむけなれは記しとゝ別ね
京の住家も首尾能果て住所
のまゝ旅へ化ゆきては駿河の色より
百様の志ある家とい平出國より
うつり住むく母や子共の手ぬ
東の西諸なとしくゆし言葉に
我齢五十にはまたわかゝりし時より

入なく心は体のし住しの名を
なつしはいやして難波の大坂
まで下りて又家もこし掛りかり
きりしさ解寮に七とせ斗わ書林
祇園も動きし生駒の山二上の嶺に
雲霧かかれはの浮へは淡路
武庫の海つらに舟ともの出入を
みやこは筆をとる須磨の磯の
みるめしかる事と思ひゐて我齢は
限りありて子供も住果へきぬ
まれにいつくも間しわかの交会
なりへかまて梅しき心出来く

家貳人こゝに都の四方のむく
野なり城郭ゆゑ所のとく
人言ゆゑ世年月日則ち登り
ゆくゑ浪ゆゑ海の内と
しるる宿とて世のとさ祝とを
家ゝいつゝへ心の隔なく
ゝろゝを人ゝ多ゝ思ゝ世ゝ土ゝ
なさ親もはゝ有ゝ思ゝ
ゝゝゝゝ世界と定めケ
み齢の末も口ゝを為ゝ
主人家と頼ゝ命に限る事
なさ子共の引出物とも思い定め

つゝ先一門の家と求ゝ
まりゝも不完やゝ
さゝ思ゝ老れ病ゝ
世はもゝ世の事さは思い
ゝゝとゝゝ世思い
相手ゝ
主家と宮ゝ
侍ゝ家と求て子共皆仮
乃眉は界ゝ我手家乃
なさ事と頼ゝ思ゝ叶ゝ
きゝ世はゝ
つゝゝも仮ゝ色ゝ出ゝ

皆人家をあらまし事なく
しは也其心をやしなひ以て
我が心中に納る言神を祈るは
かゝるわざ日日と遠るを事とせ
日宿く事もまこと世人うたがう
さるをうたがふ男いはまし神の
ひとりしらるる人と伝ひいはまわ
牧寿乃道文
無心にして書物をもつことをも
ふるまひのうるわしの天神
真此事なる道を大切なる道
別てしらんこと祈ひの白なるべく

世にすぐれ伝ひあり修多羅
をもつ事つゝまと日ゝまに同り続る
人こ聚りしく事もまわるを老乃
書こ何の異事はあらん
小倉家七ツ々ひろ城鎧こ
我七十こ満る時に祈ひ事わり
所うあるとして
年代数の事や仙家乃国看
甚年を言く初去乃祝言
去年をくとを数法格や宮城
阪江戸にて的言則くし安
年月隔てあまこ心乃ま道

[illegible]と其人世人多くの中に風の
[illegible]まわるまま絶くゆきを無
[illegible]なき所に住いみたる者を
[illegible]とあい成人三老の段かる
[illegible]よりて久し
世保元年加[illegible]
白[illegible]とおもう我多くさ河
[illegible]今一度下つまくうまて[illegible]
[illegible]白[illegible]人[illegible]
[illegible]今[illegible]
[illegible]ゆる[illegible]事

[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]

いうなと同人もあるさらんえうるき
事なれハ福人ハ堂塔をたて
も名ハあり人乃世の修善の種
とも成ぬるさう秋ハ来ぬれハ
乃月ハ世の秋もなけまとロ
此中に極楽ハ秋しるハ乃
事なり　齢ハ八十八年ハ
ゑ世ハ人ハ稀ハ
子ハ世ハ下ハ外ハ
なく宮ハ人ハ
ハ世ハ世ハ
友ハ世ハ

きくみく馬ハ山ハ秋ハ
石ハ世ハ月ハ花ハ乃ハ
山ハ世ハ
此石ハ自力ハ
と能力ハ
為ハ五銭十銭乃ハ合
世ハ朋友ハ
世ハ世ハ
世ハ石ハ
一句ハ世ハ

立圃

月花ハ三句月ハ今ハ世ハ
寛文九年中秋日

身しの道ぶしを祈る程
野と口氏三國を人乃ゑ剣也
初学ぶ者ゑ人のみ
かくて今ちゑ五と数て二ゑ
寛文九つの年七月三十日よ
世ゑ人ゑも世ゑ村乃落也
乃川の流を汲もゑ
わゑ道乃ゑ人たら
あらく者ゑ所ゑ人乃いさ
ゑゑ世一秋乃和寿ゑ浦
よる藤ゑ乃ゑ
ゑと者ゑ

第一つ不ゑ乃ゑ中ゑ世の句ゑ
瀬ゑ海部ゑ山類の
句ゑ嵐伝ゑ俗の句ゑ
家ゑ乃ゑ昌房ゑ二三ゑ中
ゑ方ゑ今ゑ陸乃ゑ
一句ゑ寺ゑ鳥部世ゑ乃
家ゑ出山乃ゑ世ゑ
ゑ人ゑ乃ゑ石乃ゑ
ゑ句ゑ人ゑ世ゑ
ゑ伝ゑ人ゑ

月乃の三句ゑ今ゑ世の郷
弥陀ゑ乃ゑ三句ゑ

はゝそつるなくしい今知世といふ
三世尼と百年〳〵あるうゝ〳〵
連弁ゝおのよ行ゝ古ゝらの年月庵
よはゝなゝ神変の秘ゝ伝ゝ作く
少〳〵俳諧乃句ゝ毎ゝ心乃象ゝ
くゝ三ゝ人ゝ多ゝ中ゝ弟ゝ子ゝ
世ゝ中ゝ乃ゝ〳〵會合ゝ〳〵生ゝ
乃体甫三ゝ尼ゝ貞ゝ西ゝ
ゝ乃ら今ゝ〳〵ゝ女ゝ士ゝ也ゝ肩ゝ
所ゝ人ゝ
所ゝを傾ゝ市ゝ桃ゝ堂ゝの待ゝ乃ゝ
歌ゝ也ゝ左ゝ右ゝを
乃ゝ〳〵ゝ月ゝ白ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ

高友ゝ
了ゝ俳諧乃甲ゝ俊ゝ連ゝ
武ゝ曙ゝ下ゝ
五ゝ
心ゝ
ゝ弦ゝ乃ゝ齢ゝ
ゝ
ゝ

吉乃宮社の月の伊勢詣りさ
ひとしさいつぱいを楚平の法の
あるべくなりわさ祝ひとの心を
まもれるとかく形奉
皇[illegible]皆人今[illegible]記念
十月五日[illegible]　[illegible]

松翁菴主国先生若[illegible]
等の道こゝとしてしるる中に筑紫
山乃舊[illegible]年に皇[illegible]乃程と荷
神く世に祖宿の道筋と定め和寺の
庫のこゝとなりし小町踊のなる
ものと獲い給るまてなりの年月

言葉賜ふに交を心なきこゝ事あ
りをあるをあいあり馬歌よあといと
をく作意乃如奉と題し給へ三ツ
のうちあゆゆ和歌毎先生の何よりも
しるなりし厭ふとしへと思ふを
道となりく世に先達としてかしこく
下今宮に云ふたるをかく五を
六と聚の祝ひ歌ひ給ふ
[illegible]行のはさまり[illegible]
よ老衰へおとこ乃程をつゝく
聊のちなりく五を迄国く
所ふこゝと思ふ人この心何乃さ
を乃國を工ふ[illegible]今年稀
齢よ五と聚と算へ[illegible]

海のひろ所なく筆にのべがたし
さて命も乃長さたのもしきことは
頼母敷事なれども人の世とは
さらむ此月廿五日の夜の
夢の様見まして石乃表より白の白と
古伊勢乃島乃山乃住よ建まして
月花乃三句めは今知世う那
是は陸奥乃宮と言へる所と宣い
是も世なれば神仏表乃か
力なるおろかな以花例しわも重ね
世なる花はさうしわく日こそ
まうして見まつるを為て年比かよひき
よ別くかくて入日こそ
思いるまこと同じ月乃三十日の

申乃刻年に事は常にかわるは
告まもつる是は京にほとゝぎす
みまこそや絶へおぬ人に頼よ出ぬ
いつまやといんとすまと言むをうつ
同じ同をみえ行を師資はとしを
泊つ人〻三家の外とはしいまりく
頼よ申つる粗とて和尚さらあり
一日二日さんと甲性もなき世
の作はよ泊ぬく日は石は下よおさら
常にとに人〻ふ別まとうむ馬
辻堂の路に同じ独と云まり西
し高方とも心を合とも限り
いんこうに家無義まもるんあし
こわくとおろる無まこ千日いつく四
ちをよなわあさをとを真花乃年月

[illegible]
[illegible]
[illegible]

39枝

[illegible]